
彼らの遅すぎる青春

mogittimogimogi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの遅すぎる青春

【Zコード】

Z7712Y

【作者名】

magittimomo

【あらすじ】

5人の異能と異常と超能と剛力と常人が青春を取り戻すために青春らしいことをみんなでやるうと色々無茶する予定です。

遊園地にいつたりデートしたり靈界にいつたりVRMMOやつたりVRFPSやつたり酒盛りしたり色々やりたいことを詰め込みまくりんぐする予定です。

はがないとかハルヒとかろーどぐらすとかああいうのにSAOとかそういうのとりあえず闇鍋にすつベーみたいな感じです。

なまたたかくぬるぬる読んでくれるとうれしいです。
感想でびしばしじいいてください。

プロローグ的なあれ

彼は両手を挙げて喜ぶ振りをした！この世界！！広大な世界！！見よ！俺の成し遂げた偉業を！そして見ろ。左を、右を、後ろを！前を！下を！！360度！雲の上である。俺は雲の上にたつている・・・・！！

がくりと地面に伏せる。体を覆う全ての衣服を脱ぎ捨てて涙を晴らし叫びたい。嗚呼、世界はかくも美しい！！だが、涙は出ない。それだけの水分はもうない。うなだれ顔が赤くなるだけである。服を脱ぐと冻え死ぬ。ここはアルプス山脈。地上4478mのマッターホルン山の頂上である。長かったここまで旅路を思いだし彼はただただ震えていた。そのまま一分程度、全てをかみしめるように震えていた。

「・・・・もういいだろ？」「

そういういつつ彼は立ち上がると彼を見ていたたつた一人の観客の電源をoffにした。

高校卒業記念に上ったアルプス山脈。マッター・ホルン。なるほど。たしかに美しい。しかし、こんなものか・・・。

右手でビデオカメラを弄びつつ、それまで彼を包んでいた壮大な景色に一切の感慨も泣く彼は山脈を降りだした。さあ、早く降りないと間に合わない。彼は無線機を取り出して下山の指示をスタッフ達に出した。

彼にとつて山は確かにすばらしかった。しかしそれでは得られない物を彼はここに求めてしまった。そういうこではない。ならば行かねばならない。『スタート地点』へ。

「一週間以内に日本に戻るぞ。間に合わないからな・・・」

彼は両手をぶらりとたらしてぽけっと立っていた。両目はビードロも焦点の合つていないうやうで、しかし全てを見ていた。

砂塵の舞いそうなほど寂れた住宅街。アメリカのどこかかもしないし、イスラエルなどの昔話に出てくる紛争地帯のかも知れない。だけど彼にはどうでもいい。少なくとも彼が慣れ親しんだ町ではないどこか。微動だにせず人気のない寂れた住宅街で彼は何かをただただ待っていた。

自分の呼吸の音とそれに併せた衣擦れの音すら彼には騒がしい。タイムアップのカウントが近づく。「おちつけ。相手も焦つている」自分自身を落ち着けるように一人つぶやく。

瞬間、田の端に動きを感じる。

見つけた・・・・・!

腰をひねりながら右手にぶら下げていた自分の物を振り上げ左手で支える。弾は装填済み、セーフティーも外してある。吸い付くようにはcopeが対象に照準を合わせる。『スナイパーライフル』遠くの敵を殺すとおぐその程度の知識しか彼にはない。たがそれでいい。扱い方さえ間違わなければほらこの通り。

音が先か赤い花の咲くのが先か、判断に迷うタイミングで対象に花が咲く。恐らくあれで最後の一人。

「you team win」

無機質な勝利メッセージが彼の目の前に広がるが彼はいつも癖でささつとメッセージを解除する。これで世界三位になつたのか・・・。感慨は薄い。それは少しはうれしいけれど、なんというか、こうじうのじやない・・・・。

「おめでとうケット！！すっげーな！！マジかよ！！しんじられねーーこれで世界三位だ！！それで明日なんだけd・・・」

耳に仲間の声が聞こえる。勝った事に興奮をかくせないようだ。

「それじゃ、俺そろそろ落ちるから」

「え・・・」

乱暴にメニューから接続切断を選択。ゲーム終了。今まで高負荷な処理をしていたであろう背後の機械からのファン音が小さくなる。身体リンク切断。ゆっくりと体を起こす。

明日は彼女にとっての一大イベントがある。彼女にとって何よりも大切な生活の始点が明日にはあった。

「明日から・・・」

スポットライトが当たる。彼女を中心に真円にぼっかり浮かんだ光の輪。

彼女の手の届く範囲、きつかりそれに計算された光の輪である。左手をゆっくりと上げる。右手に視線が集まるのがわかる。そしてゆっくりと下ろし胸の上へ。右手でスカートのフリルをつまみゆっくりと腰を曲げる。

「ありがとうございました」

これで彼女の全ての日程は終了した。

会場を割れんばかりの拍手が彼女を包む。これこそが彼女の成功の証だと言つていいだろう。たかが高校生の小娘一匹。箱は小さい

が世界中を回つて一人芝居を行つた。彼女は体全てを使って全てを表現した。彼女は彼女であつた時もあつたし彼でもあつた。そして彼らでもあつて我々でもあつた。

最期の地はラスベガス。一時寂れたとはいえ息を吹き返し、今は昔のように光きらめくカジノ都市として昔と同じ息吹を感じさせている。

そんな中で彼女は演じた。小さな小さな箱の中で。指を折ればその指先に妖精を感じた、息を吐けば草原を感じた、ひとたび声を出せばもう彼女は彼女ではなくなり、一人の老婆が姿を現した。誰一人として身動きができなかつた。瞬きすら惜しい。

『まるで幻術のようだ』『詐欺でも暗示でも魔法でもなんでもいい。もう一度彼女の演技を拝みたい』

彼女の箱は小さい。100名入るか入らないかの小さな箱。だが見た人は皆涙を流して、大枚を叩いて、それを見た。そしてその夢ももう覚めた。

彼女はゆつくりと舞台を降り、拍手に背を向けた。その表情は今までとは別。どんな表情も顔には張り付いていない。その顔はただの・・・・・。

彼女はさつと表情を貼り付けてマネージャーに笑顔を向けた。その顔は女子高生のあどけなさそのままである。彼女は急いでいた。今までの全てを取り戻すために、始まりに立たなければいけなかつた。

「や、日本にかえろ なんつたつて来週は・・・・

しん・・・と静まりかえつたプレハブ小屋の中でか細い声だけが

響く。数名の人間が一人の女性の指先に視線を集中させている。あたりを覆う圧倒的なプレッシャーは彼女がただならない物だと容易に想像できる。たとえどんな異能を身につけていなかつたとしても。

「…………」

彼女が指さす先にはテーブルに広げられた一枚の地図。あたり一
体100km四方を切り取つた市街地図だ。そこを無造作に指で指
していく。周りはざわめき慌てたようにその指が示した地点にピン
をさしていく。

「（）に指が……けど腕は（）です……。（）には携帯
電話……いえ、ボイスレコーダー？」

さりに指で指していく。そこへ周りの者がどんどんピンを刺して
いく。ピンク、黄色、青、白……。

「えっと……下水管の地図はありますか？」

横で数枚の地図を抱えていた者が慌てたように新しい地図を広げ
る。

「（）に……頭が引っかかっています。流れが速く……ち
ょっと……これは？埋まってる？」

その後も彼女が指を指す箇所にピンをさす作業が黙々と続けられ
た。途中そのプレッシャーに耐えられなかつた一人が顔を真つ青に
して外へ出て行つた。他の者も背中が冷や汗でじつとしめつ
ている。天井についてる蛍光灯がブーン・・・ブーン・・・と五月蠅
い。

と、彼女を覆っていたプレッシャーが一気に霧散した。

「終わりました」

一斉に周りが騒がしくなる。皆プレハブから飛び出して携帯で指示を出すもの、車に乗り込むもの、縁に乗り込むもの、地図を詳しく分析しはじめるもの。まるで時間が一気に短縮されたように錯覚する。

「お疲れ様です。今回も遠くからわざわざ足労いただき・・・」

「い、いえ！わたしもちょっと・・・お願ひされたので・・・ちよびよかつたというか・・・」

低姿勢で接する現場の監督らしき人に彼女はおどおどと視線を宙に浮かせていく。腰まで流れるように伸びた彼女の白銀の髪がゆらゆらと揺れていた。彼女が変なのはいつもの事だし、あまり追求しても自分の常識がダイナマイトよろしく粉碎されるのが目に見えているので彼は何も聞いていないし見ていない事にした。

「・・・それで、今後の予定なのですがー」

「あのつ・・・あ、明田はちょっと用事がありますして・・・」

彼女は思った。私は変だから、違うから。そうやって今までしてきた。だけど、だけど変わらなければいけない。だつてこのままだったらあまりにも・・・そうあまりにも自分は・・・。だからこそ。

「ちょっとしばらくお休みをいたただこうかと思いまして、もう私が居なくても大丈夫だと思いますし・・・それで明日は・・・」

なんたつて・・・

「「「始業式だから」」」

一話 自己紹介をしよう？

世界はここ100年くらいで一気に変化してきた。遺伝子工学の発達、クローン技術の解放、VR技術発明、シックスセンスの確立・・等々。ちょっと昔では異能や超常現象、未来の技術だと想像の中でしか考えられなかつた物事が一気に俺たちの目の前に『常識』として現実の物として現れた。

だからといって100年前や200年前と、多分変わらざきつと俺たちの生活自体は変わつてないとと思う。クローン技術が公の場に解放されたからといってレトロ映画の『ジュラシックパーク』よろしく恐竜が闊歩する遊園地はできなかつたし（なんか遺伝子はほとんど完全に残つていないとクローンとしては作り出せないらしいね。あれつて）、VR技術ができたからといって、今までPCにかじりついてゲームしてた奴らがそれにシフトしてつただけで、特に少子化問題に拍車をかけるようなこともなかつた。シックセンスなんて科学者がようやく認めたからといって、遙か昔から幽霊の存在なんて皆見える人には見えてたどろしき見えない人はこれからも見えていだらうから「ふーん」つて感じだつた。

しかしやつぱりそれと同時に弊害というか例外が出てきた。超能、異常、異能を持つた人々の誕生である。昔からそういう人々はいた。曰く「幽霊が見える」曰く「異常な動体視力を持つてゐる」曰く「人の考えがわかる」曰く「ワンフレームの小足余裕です」とかとか。虚実ももちろんあつただろう。しかしあらゆる技術が進歩する中で明らかに強力なそれらの能力を持つた人々が誕生してきた。もちろん世界中の国では、そういう人達を囲い込もうとする動きが活発になる。

もちろん俺の住む国日本も例外ではなく、幼少期から成年後まで一つの都市で囲い込みができるように、広大な敷地を持つ都市を設

立。本土から遠く離れたこの都市で、俺は生活している。

俺の名前は上村圭。黒い髪に若干茶色の筋の入った瞳を持つ生糸の日本人。身長若干低めだが平均値、やや童顔。高校一年生。俺は今自分の通う学園の一学期始業式に参加中である。

バスケットコートが8枚ほど収容できるほどに広大な体育館には、小学から大学までの全校生徒がずらつと整列中である。といつてもその数自体は500人ってところか。一年生30人いるかいないかといった感じか？ここは異能を収容するこの都市唯一の異能専用の小中高大一貫の学校。現在はその広大な学園のトップ、学園長の挨拶中だ。白髪混じってはいるがまだまだいけナイスガイといった風貌に、中々カリスマを感じる。といつても体育館が広すぎるため大きなモニターに映した画面越しにみてるわけだが。

こういう前置きをすると「おーいかにもお前ってなんかすげー能力でももってるの？なんかやつてよ。」みたいな反応が返ってきてそうだがまったくもって俺は常人である。平凡、ノーマル、平均値、標準。特にこれといった面白みのなにもない人間だ。

「どうしてこうなった……」

自分でも思う。場違いすぎる……。右隣を見てみる。なんか凄い筋肉むちっと制服からはみ出した人が居る。あ、見られた。

「なんだ？どうかしたか？」

「い、いえ！何でもないです……」

「えーよ。何だよこの人。高校生かよ。昔のカンフー映画に出てきそうな顔してるし……。元は丸刈りだったのだろうか。伸び放題の髪を無理矢理整えたようだが、髪がつんつんと暴れ放題になつてはいるが、ギロリと光る切れ目がものぐさというよりワイルドな風貌としての印象を強くしている。凄い筋肉だと認識はできるが

以外と線は細そつである。「うーん。制服にあわねえ……。

「お前見たことない気がするな。一学期にいたか?」

「い、いえ……えーっと今日から入学……です……よ?」

やべー よすげー えー よなんだよこれあと10秒睨まれたら俺ち
びるだ。というかあれかもつと畏まつた方がいいの? これ。やべー
対応間違えたかな。というかこの人明らかに異能者だよな……お
れの学園生活初日にしてバツドエンドじゃないの?

「そうか。俺の名前は志貴崎 桃といつ。よひじく。そこへ座つて
いると言つことは、同じクラスで授業を受けることになると思つ。
分からぬことがあつたら聞いてくれ。手を貸さう」

ぬうつと手が出てくる。・・・・握手でいいのかな?

「え、あ、どうも。上村 圭と言います。ありがとうございます。
しきせき、でもみじですか。四季咲きの紅葉とは洒落ていますね」
とりあえず良い人そうでよかつた。志貴崎さんは俺の言葉に少し
だけ口角を上げて「おれも気に入つている」とだけ言つた。

俺も手を差し出して握手をする。ぎゅうつとかなりの握力にびつ
くつする。志貴崎さんの手はじつじつしておつ、よく見ると傷だら
けだった。深く考えないようじしよう。

と、横から制服の袖を引っ張られた。ちよつと騒がしそぎただろ
うか。謝りながら左に向くとする。

「あー、ひぬをくじめんなさい。」

「……いい。……私も初めましてしたいだけ」

見ると小柄な女の子が俺の制服の袖を引っ張っていた。耳が隠れ
る程度のショートヘア。見ようによつては少年にも取れるが半開き

の唇からは何ともいえない色氣を感じる。肌の色は白くちゅうと生氣がかけているよりも感じじる。そして何と言つても特徴的なのはその瞳だ。ギラッと光る瞳でも言つのか。見つめると吸い込まれそうな程に真っ黒で、彼女がどこを見ているのか正確に判断できなくなりそうだ。そしてスカートからのぞく細いふとももに一瞬どきつとしてしまう。こういう女の子が夏服でいるとなんとも肌寒そうだなーとか思つちゃうのを俺だけでしょつか？皆わん。

すつと手を出される。どうやら俺が今日からとこう話を聞いて挨拶をしてくれたらしい。俺も手を差し出して握手をする。先ほどのゴシック手とは違ひ華奢で細い手だ。

「・・・よひしへ。私は野谷 卵円」

「上村 圭です。よひしへお願ひします」

内心女の子との握手でじきじきしてしまつが必死に冷静を裝つ。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

「ほり野谷も今日は来ていたのか。直接会つのは入学式以来じゃなつてきた・・・・・」

「ほり野谷も今日は来ていたのか。直接会つのは入学式以来じゃないか？」

セレで志貴崎さんが口をはさんだ。正直助かつた。

「・・・お互にあまり学校・・・来ない、あと、ミキも来てる。」「ほり野城もか。後で挨拶に行くとするか。」

「・・・・ん」

それに野谷さんも答えるが、何とも違和感がある会話である。入学式以来？今日は一学期の始業式だから単純に三ヶ月から四ヶ月程度はこの学園の高等部に在籍していたはずだ。しかも確か高等部は各学年一クラスずつ。それにさつき志貴崎さんは『そこに座つていると言うことは、同じクラスで授業を受けることになると思つ。』と語っていた事から同じ学年で同じクラスのはずだ（志貴崎さんと同学年というのに改めて驚愕するが考えないことにしてよい）。ここは素直に疑問を口に出す事にする。

「どうじつですか？同じクラスで授業を受けてるわけじゃないんですか？」

「あー、俺たち一人は特別でな。いや、えーっと、あと四人ほど特別なやつが高等部にはいるんだが。それでー」

「・・・私たちは授業を受ける義務が・・・ない・・・」

むむつという感じで腕を組んであーとかうーとか言いながら説明しようとする志貴崎さんと端的に答える野谷さん。

「はー？」

話を整理すると、どうやらこの学園の中でも異能中の異能は授業に出る義務自体が無いらしい。異能者の中にはランクのよつた物があるらしく、それが一定を超えるとあらゆる研究機関や会社から色々な話が来る。そういうたところへの協力をするために学園側へ休学届を出して休学し、そいつた所へ行くわけだが、なんとの二人はその休学届すら出さずにそいつた所へ行けるらしい。チートか・・・。

「ちなみに俺は異常者にカテゴライズされていてー」

「い、いえ！ また後で聞きますー！」

頼んでないのに志貴崎さんが自分の能力の話をし始めようとしたので慌ててやめさせた。これ以上俺の『常識』を壊さないでくれ。

「・・・私も異常者」

「そ、そうですか。それも後で聞きます」

「・・・うん」

野谷さんも負けじ（？）と能力の話をしようとしたのでとりあえず中断させる。しかし二人そろって自分から『異常者』なんて言わないでくれ。知識としてはあるがなんというかサイコさんにしか見えなくなる。野谷さんは自分の話を聞いてもらうのが嬉しいのかうつすらと頬が赤くなっている気がする。なんとなく頭をなでたいかわいさがあるな。小動物系というか。妹がいるとこんな感じなのかなーなんて同級生に失礼な事を考える。

初めのうちはどうなるかと思ったが、なんとなくこの二人とは仲良くできそうな気がする。

そんなやりとりをしながらも始業式は結構進んでいたらしく、進行の指示により端の方からどんどん人が立ち上がり体育館を出て行く。

「んーあと少しここにすわったまんまかなー」

思ったことがそのまま口に出る。自分たちが移動するまでもう少し時間がありそuddた。

「そうですねー」

自分の何気ない一言にいきなり言葉が返ってきたのでびっくりして声のした方に振り向く。そこには銀髪の美しい女の子が立っていた。瞳の色や顔の造形が日本人の特徴をしているから恐らく日本人

なのだわ。しかし銀髪に負けず整った顔立ちをしている。体つきも野谷と同じ制服を着ていることから高校生だと思えるが、にしてはしっかりと出でる所は出でているみたいで大人びて見える。そりいえば始業式始まる前にこの席に案内されたとき、この列の一番端に銀髪の人が座っていた気がする。自分の場違いを加減に気が動転していく気がつかなかつた。

びっくりした俺を見て彼女は「『めんなさいね』と謝つた。いたずら成功とでも言つた感じで舌を出して。反則過ぐるだろ。

「貴方、今日からこの学園に入学するのよね? 教室に案内するように先生から言われたんだけれど」

「ああ、なるほど。よろしくお願ひします上村 圭と言います」

「鬼谷 凪です」

静かに微笑む鬼谷さん。じきまきしてしまつ。優しそうな雰囲気に柔らかい物腰。こんなきれいな人とお知り合いになれるなんて俺つて幸せ者だなー。ここに放り込みやがつた姉には感謝するべきかなーなんて考えていると

「おお、鬼谷も来てたか!」

「・・・久しぶり」

「あら。野谷さんとはたまに顔を合わせてましたが志貴崎さんは入学式以来ですね」

さつきと似たような会話が繰り返されてる現状に頭の中が真っ白になりそうです。

「あの、志貴崎さん」

ギギギギつと体の節々がさび付いたように動かしづらい。それにこの仮定を『事実』にする確認するのがたまらなく怖い。

「なんだ」

「彼女も『特別』なんですか？」

「やうだ。彼女は超能者でー」

仮定が事実になつたと同時にさうに能力の解説も丁寧にしきつとした志貴崎さんを必死で止めて、とりあえず俺の精神汚染を食い止めることに成功した。そんなあわあわしている俺を鬼谷さんがじつと見ていた。なんとなく探られているようにも感じる。

「えつと・・・なんでしょうか？」

「いえ、何でもありませんそろそろ移動しませんか？」

「？」

疑問は残るが彼女がなんでもないというのだから何でも無いのだろう。移動を促された俺は席を立ち彼女の後ろについていく。そして当然のように俺たちについてくる志貴崎さんと野谷さん。

「そりいえば体育館から自分の教室までどうやって行けば良いのか知らんなあ」

「ほけつとそんなことを言い放つ志貴崎さんに鬼谷さんがため息をつく。いやいやどんだけ学校来てないんだよ志貴崎さん。深く突っ込むといらなことまでしゃべり出しちゃうなので突っ込まない。まだ心の準備が・・・。

俺たちの教室がある建物は体育館からいつたん外に出て敷地をしばらく先に歩いた先にあった。小、中、高、大の教養棟が4つ、文化棟、技術棟、研究棟、それによく分からぬ建物と寮がいくつかがこの敷地内にはあるらしい。鬼谷さんの案内で高学棟へ、俺たちは皆一年生なので一階にある教室に入る。ちなみにワンフロアにつき4つほど教室があり、それが三階建になつており学年が上がるご

とにかく、二階と上がつていいくらしご。といつわけで一クラスしか
ない俺たちの学年では一階の残り二つの教室は使わないことになる。
現在は倉庫となつてゐるようだ。

「貴方のクラスはここだ、席は一」

「・・・私の横」

ひとつやら野谷さんの隣になるらしい。窓際の一番奥、教卓から一
番奥の席に俺は座ることになるらしい。ちなみに鬼谷さんはだいた
い教室の真ん中、志貴崎さんは廊下側の一番前。なんといつか皆『
らしき』場所に席があるな。（俺の中のイメージではクラスの真ん
中は委員長、窓際隅つこが田立たない子、廊下一番前がやんちゃ坊
主といつた変な偏見がある）

「やつか。よろしくお願いします」

「・・・よろしく」

野谷さんに改めてよろしくすると、照れてるのかちょっと下を向
いてもじもじされると困る。あたまなでなでしたい。

にしても、教室自体は馴染みのある普通の教室だ。至る所になん
かつづら傷みたいたのがついてたりするがボクハナーモミテイナ
イ。とりあえずこれから俺はここで学校生活をするわけだ。まだま
だ不安はある（むしろ不安しかない）けれどどうにかうにかやつ
ていけそうだ。

一話 自己紹介をしよう？

「今日から一緒に勉強することになります。上村 圭です。よろしくお願いします。」

お辞儀をする。無難にまとまつたはずだ。趣味、好きな物、今はまつてある物。うむ。無難である。誰も傷つけずこれから的生活に一切の問題も起こさない。すばらしい自己紹介であったと自負する！そもそも俺以外は全て異能の人々だ。きっと魔法が使えたり、忍者よろしく天井上から降りてきたり、夢の中に現れて悪夢を見せたりするに違いない。敵に回すと恐ろしすぎて考えたくも無いからな！

「はーいよろしくお願いしますねー。誰か質問とかあるかなー」

俺たちの担任は黒縁めがねのちょっと疲れたサラリーマンって風貌の人だった。あと始終なんか口調が軽い。

「はい」

ぬつと手が上がる。志貴崎さんだ

「志貴崎さんどうぞー。どうか久々だねえきみー僕の名前おぼえてるかなー？」

「上村の能力をまだ聞いていない。差し支えなければ聞きたい」

あー、そうだった。そういえば俺の身の上はまだ誰にも話していないんだっけ。そして先生のスルーされっぷりがかわいそう。

「えっと、俺の能力は無いです。一般人です平凡です平均です。な

思つた事を口に田すと回聲にどひつか俺に異能をわらさないにとお願いした。すると周りの空氣が固まるのが分かつた。志貴崎さんが変な顔をしている。野谷さんも田をいっぱい広げている。あんなに田つて広がるんだなーなんてのほほんと思つていた。

教室中に響き渡る笛の声に俺は気を動かしてどうあえず謝る事しかできなかつた。もはや半泣きである。何?俺変?こわいよーもつねうちかえりたいよー。

「何故なんの能力も無いやつがここにいるんだ！」

志貴崎さんがあわあわしているのは何とも滑稽でオモシロいが、次の瞬間何をしてくるのかわかったもんではないので素直に答える。

「えつど、おねえ・・・姉が俺を入れないと学園に入らないって、コネたらしくて・・・学園側が折れてここに入れられました」

一 学園が折れた！？あ、ありえん・・・」

しかし学園側が折れたのは事実である。まあその理由は「弟と一緒に学校かよつのつてたのしそうじやーん」つていうだけなんだが、それにつきあわされる学園もたまたもんじや無いな。

「学園が折れる・・・上村・・・もしかして上村さんの姉は上村
沙紀さんですか？」

「はい」

間に入った鬼谷さんに俺が答える。鬼谷さんもなんだか余裕がな
さそうな顔をしている。そのやりとりをみていた教室中の空気が凍
る。『異次元訪問者』『超越者』『潜る者』なんて言葉があちこち
から聞こえてくる。つい、姉はなんか色々トラブルをここでまきち
らしまくっているらしい。これはもしかしていじめフラグですか？
とりあえず俺はこの何とも言いがたい空気を霧散させるために口を開
いた。

「えっとあの、姉がなんか色々やつてるらしく申し訳ない。けど、
あの、俺自体は本当なんの能力も持たないで、まあ自分でも場違い
だと思ってるんですが、通えと許可も下りたことだしすでに入学さ
せられちゃったんで、がんばって勉強しようと思います。仲良くし
てください。よろしくおねがいします。以上です」

と一方的にまくし立ててお辞儀をして自分の席へ戻った。

「・・・驚いた」

「い」、ごめん最初に説明しなくて。何か普通な俺がこんな学園に入
つて良いのか緊張してて・・・

「・・・良い」

隣に座つた俺に目を見開いていた野谷さんだが、俺の言葉に入
ふるふる頭を振つて許してくれた。よかつた。

すると前の席に座つていた女の子が振り向いて話しかけてきた。

「本当驚いたよ。まさか何も能力も持つてないやつがこんなところ

に来るなんてヤー

「す、すいません」

「いーつていーつて。私は山城_{やまし}ミキ。よろしくー」

「よ、よろしくおねがいします」

またもや美人さんである。頭の両方で絞ったツインテールがきれいにそよぐ。髪の色は綺麗なブラウン。元氣印といったほうがいいのか。整った顔立ちで表情がころころ変わる。しかし何だかそれが不自然にも思える。魅了されるというか、彼女以外が目に入らなくなるというか・・・。そういうえば山城ミキといえばさっき聞いた名前のような。うんボクイヤナヨカンガスルヨー。

「野谷さん。もしかして山城さんつて」

「・・・・ん。・・・・『特別』。・・・ミキは異能者でー」

「うんそつか。ありがとうございます」

野谷さんの説明を一回区切つて現実逃避する。そつかー彼女もかー。ここで知り合つた人皆特別かー・・・・どんな確立だよーもーあーもーふふふー。

そういうしているうちに先生の説明は進む。とりあえず今日は授業はないらしい。このまま今日は解散となり下校だそうだ。委員とか諸々はまた後日決めるらしい。なんかこの教師すごい加減な気がしてきたよ?俺。

「それではー今日はここらへんで終わりですー」

お疲れーといいながら出て行く先生に続き皆席を立ち上がりそれのやりたいことをやり始める。俺は今日一日の緊張感から解放されて机にべたつと倒れ込んだ。うう。胃に穴が開きそうな気がしてきた・・・さて。俺はどうしようかな。家に帰るか?

「上村ちょっとといいか?」

「え? あ、志貴崎さん。はい」

顔を上げると志貴崎さんが立っていた。じつちが座つて向こうが立つているこの状況だと志貴崎さんの威圧感がやばい。おつかなびっくりしている俺の様子に疑問符を浮かべる志貴崎さんであつたが、どうやらお脣に誘いたいらしい。この学校の事もよく分からないだろ? 俺自身の事にも興味があるらしい。基本良い人なんだなと再認識してその誘いに乗ることにした。その話を聞いていた山城さんと鬼谷さんと野谷さんもついてくる事に。

そんな訳で食堂がある建物に向かつているわけだが、高学棟から出たとたん何か凄い視線が俺、といづより俺たちに向けられている。正直もう耐えられません。

「なんでこんなに注目されているんでしょう?」

「そりやー私たちってあんま学校に来ないし。それぞれ結構有名人だしねー。それにーあなたの噂ももう広まってるんじゃないのー?」

「ええ! ? 無能力ってだけで噂に! ? そりや珍しいでしょ? けれど学園の外に出れば僕みたいな人なんてたくさんいますよね?」

「いえ、上村さんの場合お姉さんがあの方なので・・・」

「ああー・・・」

「いやいやっと俺を物色するよつな田で見てくる山城さんになり、鬼谷さんが説明してくれる。どうやら姉はこの学園のペリソナル・ティント頂点に君臨しており、その破天荒な性格も災いして色々と騒ぎを引き

起こしていたらしい。それが一学期の終盤近くいきなり沈静化、といつより彼女自体が学園から姿を消したらしい。まあその理由も多分俺は知ってるわけだが。

そしてこの四人の組み合わせはかなり凄いことらしい。まあ入学式以降あつてないとか教室までの道覚えてないとか平氣で言い出すような人物達が四人集まっているわけだからそりやそうか。というか転校初っぱなから凄い注目を浴びてるのってやばくない?やばいよね?俺つてもうへへへ

四人で食堂に入る。全校生徒が使うことで、建物一つまるまるの食堂らしい。すごく広い。とりあえず食券を買う。うーん何か今日は疲れたし、おなかもあまり空いていないので無難な感じでサンドウィッチセットで。他の四人もそれ食券を買い、料理ののつたお盆を受け取つて席に着く。ふむー。それなんとも特徴が出ている。野谷さんはスパゲティ、山城さんは俺と同じサンドwichセツト、鬼谷さんは和食セツト、そして志貴崎さんはなんとステーキである。まあその体だとそれくらい食べないと体が持たないのだろうが。

と、そのままスパゲティを食べようとする矢野さんにハンカチを差し出す。

「…………え?」

ハンカチの意味がわからないらしい。

「えーっと必要ないかもしねないけれど襟にかけてください。ソース飛んじゃつたりすると悲惨だ・・・ですから

「・・・・あ、ありがと」

野谷さんは素直に俺のハンカチを受け取つて自分の制服の襟に引っかけ、小さくスパゲティを丸めてゅっくりと食べ出した。黙々食

べてる姿がなんとも小動物的である。なでぐりたい。

「紳士じゅーん。見直しちゃうよー」

「いやいや初対面ですから。見直す元ないでですから」

軽く冷やかしてくる山城さん^{やましろさん}に突つ込む。

「・・・ふえふにおへたちにそんふあふあとふかいしふあふていい
「口の中の物を食べきつてからしゃべってください」

リスクこの人は。ステーキ口いっぱい頬張りながらしゃべられて
も恐怖感しか相手に「えなーい」。

「・・・・・んむ。別に俺らにそんな口をきかなくても良い。むつ

き言い直したつて事は普段はそんな言葉遣いじやないんだろ?」

「そーねー」

「そうですね」

「・・・・・ん」

「はあ・・・・そりで・・・・そつか」

皆普通の言葉遣いでしゃべつてもらいたいのうなうので普段通りのしゃべり方に戻す事にする。この人達変なオーラ出してるからつい言葉が「寧語になっちゃうんだよなー。がんばって普段通りを心がけよう。しばりくは無言で食べる。普通のサンドウイッチだと思つたが、挟まっている素材に気を遣つているらしい。レタスとキャベツを両方使つたりして歯ごたえや味に変化があつて面白い風味がある。チキンも挽き立ての胡椒が使われているらしく風味が良い。

「へえ。美味しいな」

「ふおうふあら」

「いけるよねー」

「・・・ん。おいしい」

「やうですねー」

サンドウイッチセットだといつても結構なボリュームがあつたが飽きない味付けも手伝つて軽く完食できた。あと志貴崎さんが食べながらしゃべるのは聞かなかつたことにした。

「それで、上村。どうしてお前がここにくる事になつたのか、詳しく述べたいんだが」

ステーキを食べ終わつた志貴崎さんが口を開いた。しかし食べるのが早いなあんた。野谷さんまだ食べ終わつてないぞ。黙々食べる姿が小動物的で以下略。「もちろん喋りたくなければ喋らないで良い」と志貴崎さんが言つてくれたが、別に俺として隠すような事は一切無いので説明することにした。

「別に詳しくも何も、6月くらいに姉が突然俺の部屋に来て開口一番『圭、お前も私と同じ学校にいくのよー!!』って叫んだと思つたら、外に飛び出していつて、まあ意味もよく分からなかつたし、そのまま放つといたら夏休み中に学園案内の分厚い郵便物が来て。元の学校からも転学扱いになつてし仕方なくここに」

「相変わらず自由すぎるな。お前の姉は」

志貴崎さんは口を大きくへの字に曲げて変な顔になる。

「それでー? その圭のお姉ちゃんはどういつたの?ー」

「デザートの杏仁豆腐を幸せそうに食べながら山城さんが聞いてきた。この人はいちいち仕草がかわいすぎて困る。もつと見ていていい

『気持ちになぜかなるのを必死に押おえて山城さんから視線を外す。

「俺も良くわかんねえ。というか『同じ学校に行くのよ宣言』からすぐどつか行つちまつた。てつたり学園で何かやつてるのかとか思つたんだがそつでないんだよな。……山城さん達の話を聞くとさ」

どうしても『圭』と下の名前を言われた手前、俺も『ミキ』と返したかつたが、いつぱずかしくてできなかつた。俺のばかばか。ちなみに山城さんにはバレてるみたいですが、ニヤニヤしてゐる。……くそ……。

「ふふん。うんそーだよ。といつても私はあんまりガッコになかつたから『圭』のお姉ちゃんは私の居ない合間にきてたかもしれないけどー。顔は？」

やつぱばれてやがる。

「見てないな」

「・・・ない」

「みてないですね」

「そつかー。まあ置き手紙に『魔王を倒してくるからちよつと異世界いつてくるね』（右下に大きく猫の顔）」つてのはあつたんだが。まあいつもの『冗談だと思つし』

俺の言葉に志貴崎さんが変な顔をさらりに変にして、鬼谷さんがお茶を吹き出し、野谷さんが固まり、山城さんが杏仁豆腐が気管に入つたらしく咳き込んだ。なんとも大惨事です。

「ちよー何その反応！……いや、やつと『冗談だつて。地球の裏側とかで楽しくやつてるだけだつて…』

「それもどつかと思つうが・・・」

「…………ううだと良い」

「まー、あの人ならどこにでもいけちゃうううな気がしてきて……

・

「そ、さすがにないですよね」

姉はどんな生活を「」で繰り広げていたのだろうか。胃に続き、頭も痛くなってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7712y/>

彼らの遅すぎる青春

2011年11月23日19時50分発行